

### Ⅲ-9. ボランティア活動報告

#### 山田町チームボランティア報告書

医学部 6 年

齊 藤 丈

この度私は 4 月 30 日～5 月 3 日までの山田町ボランティアチームに参加し、若輩者ではありますがリーダーを務めさせていただきました。簡単にではありますが自分が今回の活動で行ってきたことと考

えたことについて報告したいと思います。まずは活動について時間を追って記していきたいと思います。4 月 29 日、私達は品川京浜急行高速バス乗り場に 9 時に集合し、バスにて同日 9 時 40 分に東京を出発しました。ゴールデンウィーク初日で、被災地へのボランティアラッシュも重なり、盛岡到着までに 12 時間近くかかりました。そして 22 時頃に盛岡駅に到着し、宿泊先であるルートイン盛岡にて木内先生・阿部先生と合流し、夕食を食べながら今後の活動についてミーティングを行い、1 日目を終了しました。

4 月 30 日、我々は 5 時に起床し、5 時 15 分にホテルのロビーにて集合しました。盛岡駅前のバス停より 5 時 45 分発のバスに乗り、2 時間をかけて宮古駅前バス停へ向かい、その後タクシーで 1 時間かけてボランティアセンターのある山田町の B & G 海洋センターへ向かいました。（行きは 5 月 1 日まではこのルートで山田町へ向かい、5 月 2 日のみボランティアセンター近くまで全てバスを利用して行きました。）

ボランティアセンターに到着後、我々は昭和大学のボランティアチームとしてセンターで登録し、その後センターに要請のあったニーズ（仕事）を振り分けられ 22 時頃より活動を行いました。この日は山田町チームは隊を 2 隊に分け、1 隊は民家の掃除、そして自分が参加したもう片方の 1 隊は山田町役場に届けられた物資の仕分け（日用品から衛生用品、衣類や食器など物資は多岐にわたっていた）を行いました。途中 1 時間の昼食休憩を取りながらも 15 時 30 分まで活動を行い、その後スタッフの方々のご厚意で震災後の山田町の様子と役場にあった小さい避難所を見せてもらい、現地にて解散。山田中央

町のバス停にて別隊と合流。先生方の勧めもあり、バス到着までしばらく時間があつたので地元住民に失礼の無い様に注意しながら付近と港を見て回った。その後 16 時 48 分に山田中央町をバスにて出発。17 時 50 分ごろに宮古駅に到着し、18 時発の山田線（電車）にて盛岡駅へ向かい、20 時 50 分ごろ盛岡駅に到着。その後、前日と同じようにミーティングを行い、2 日目を終了した。

5 月 1 日、先日と同じような交通手段でボランティアセンター入りした後、3 日目のボランティアを開始しました。今回は午前・午後とも全員同じ場所で活動しました。まず午前中は民家の集合した地域での活動で、午前中女性 4 人は地元の方 1 名との共同作業で民家の庭の清掃（ガラス等の細かくて危険な物の片付けも含む）を行い、男子 2 人と木内先生、阿部先生は岩手県の高中生と職員の方々との共同作業で民家の床の取り壊しと下の土質安定処理目的での消石灰散布を行いました。午後は場所を移し、津波で破壊された広大な田畑での清掃作業を静岡県の大學生チームとの共同作業で行いました。内容は流木や家屋・機械の瓦礫、地引網や化学製品、金属類など様々な残骸の分別と撤去で、この作業が 1 番大掛かりな活動だったように思えます。

15 時までの活動後、木内先生の提案もあり、我々も興味があつたので、昭和大学救援隊の活動拠点であった山田町立山田南小学校の避難所を訪問し、被災者と責任者の方々にご挨拶をし、その後山田病院へ向かい、病院長である及川修次先生をはじめとするスタッフの方々にご挨拶をし、現地での 1 か月間についてお話を聞くことが出来ました。その後、バスにて宮古市、盛岡市まで帰り、ミーティングを行ってから 3 日目を終了しました。またこの日の 23 時頃に木内先生は東京での業務があるため夜行バスにて東京へ戻られました。

5 月 2 日、いつも通り（ただし今日は行きの交通手段は全てバス）ボランティアセンターへ行き、10 時頃より活動を開始しました。ボランティア最終日は全員でセンター内に送られた物資の整理を 1 日中行いました。内容は医薬品からタオル、衣類などの整理で、15 時半まで行い、センターのスタッフの

方々に今までお世話になったことのご挨拶とまた都合をつけてボランティアをしたいという意向をお伝えし、その後阿部先生に案内していただきながら救援隊の活動拠点であった山田北小学校の避難所、善慶寺を訪問し、その後バスにて盛岡まで帰宅しました。最後のミーティングを行った後、阿部先生に見送られながら夜行バスにて盛岡市から東京まで帰り、品川にて解散となりボランティア活動を終了しました。

今回の活動の前に私は自分なりに考えていたことは色々であり、予備知識として被害の甚大さや情報なども後方支援及びマスコミを通じて得、ある程度の覚悟を持ってボランティアを迎えました。

何も出来ないかもしれない。もしかしたら地元の人達からは歓迎されるどころか門前払いをされるかもしれない。思っていた以上に自分の中のショックが大きくて立ち直れないかもしれない。今から思えばこれらは全て杞憂に終わった悩みでした。現地では全国から集まったボランティアの方々と地元の人々が力を合わせ、ボランティアセンターという場所で挨拶を交し合い、時折笑顔も見せながら共同作業をしていましたし、インフラが整備されてないとは言うものの活動拠点の近くには電気が復旧してる場所が必ずどこかにあり、水道も整備が始まり限られた地域ですが復旧している場所もありました。災害が起こってから僅か1か月あまりですが、その1か月でも人間のやれることは数多いことを知りました。

しかし、この状況を逆に言えば自分達は本当に被災地が窮地に陥っている時期を見ておらず、まだそこに立ち入る資格すら無いという事も言えます。確かに街の風景はまだ凄惨としていて、腐敗臭も感じたり人々の必死に耐えようとしている顔が見て取れるときもあるのですが、自衛隊・警察・ボランティアセンターなどが街を整備し、物流も少しずつではありますが回復していて、体制は整い始めています。我々はその中で活動をさせていただいたのであって、これを自分の力で震災後数日しか経ってないときに同じことが出来るかといわれれば、それは不可能に近く、ましてや自分が将来やりたいと思っていた医療活動は尚更だと感じました。

復興は進んでいるものの、まだまだやることも限りなく多いのも事実で、津波によって破壊された家

屋の残骸・ゴミなどの量は果てしないです。自分が行ったときは、元々海水浴場であった場所でスクラップや資材・ゴミを回収して再利用できるように加工する作業を行っていたのですが、その量がすごくて、先が見えないほどに資材の山が広がっていました。しかもこれでもまだ回収が済んでいなく、まだまだ残っているインフラの修復作業、仮設住宅の設営、住居や漁港などの施設復旧なども考慮に入ると少なくとも5年、長くて10年かかるだろうと役場の方々は仰っていました。我々も今回だけでなく、長期的な支援の必要性を知りました。

今、ボランティアのあり方、参加の仕方や、被災地への支援方法についても様々な見解があります。「長期休暇の時期は人が殺到するがそれが終わると途端に人がいなくなり、やれる事が限られてしまう。」「現地でボランティアをするのはいいものの、まるで記念写真を撮るかのようにカメラを取っただけでしゃいでいる人がいる。お酒を飲んでいる人もいる。そうでなくても現地の食料を減らして迷惑をかけているのに、果たして被災地へ行くことが良いものなのか」「いくら募金や物資支援をしても自治体に回っていきなく、結局企業や団体レベルで止まっていることがある。やはり現場へ行ってやれることをやってこそだ。」「物資支援といっても現地の人が欲しいものを届けなければ意味が無い。」「今回の震災では〇〇科が必要である・ない。」「被災地において本当に必要な人材を吟味する必要がある。」

新聞・テレビ・ラジオ、またインターネットに公表している各医療施設のHPをざっと見ただけでもこれだけの意見が飛び交っています。ネガティブな意見ばかり集めて申し訳ありませんが、少なくとも現地へ行った自分としてはこれらの意見は全て正解であり、不正解でもあると思います。今は大小・種類関係無くあらゆる支援を被災地は必要としていて、医療にしても現地の人々に話を聞いてみると「科を問わず様々な地域から来ている数々の先生にお世話になった」「歯科医師、看護師、薬剤師、作業療法士、理学療法士など、様々な医療職の方々が健康を害されてる地域住民を診ていた」という意見もありました。無論、復興も進んでくるとまた状況が変わり必要とされるものも変化していくと思いますが、一番大事なのは、協力・支援を惜しまないという思いの下、他者を批判しないですぐにどうすればより

早く、確実に復興に繋がっていくか考えるべきだという事も感じました。

「医療の原点を再認識することが出来た。」この言葉は木内先生が「救援隊のメンバーの方の感想で、この言葉の意味を考えながら活動して欲しい」と出発前に僕達に言われました。もともと厳しい受験戦争を経て医療系へ進学し、その影響とマッチング制度も相まって、今「自分が将来やりたいことを考え、自分のためにより良いキャリアパスを進むために初期研修を自由に選べる制度」という風潮があるように感じます。また自分の専門とする科を選び、認定医・専門医を取得するのに重きが置かれた今の医学教育の制度では、そのために症例をより多く集め、手技も数多くこなし、優秀な論文を作るということに重きを置かれています。自分は上記のどれも批判するつもりは無いし、いずれは（近い将来かもしれない）こういった道を進んでいくのであろうと思います。しかしあらためて被災地へ行き、そこで見聞きしたことを思い返すと、改めて自分の生活を改める必要があることを思い知らされました。正直に申しますと、自分の努力不足のせいでもあるのですが、様々な業務に追われ、普段の実習で患者さん全員の気持ちを汲み取り、理解できたかと言われると自信は持てません。あれだけ被災地へ行くと鮮明に様々な人の表情や風景は思い出せるのに、実習で触れ合った患者さんのことはそれほど鮮やかに蘇ってこないのです。しかし病院内で病に苦しみ、苦痛な表情を浮かべ必死に耐えている患者の姿と、自分の住んでいた土地が跡形も無く破壊され、見るのを耐え忍んでいる地元の方々の表情は共通するものがあるはずで、ヒポクラテスの誓いや、高木兼寛の「病気を診ずして病人を診よ」という言葉があるように、少なくとも医学は病に苦しむ人々のために発展したもので、その大前提を忘れてはならないと反省しました。そして、そのみならず、今回の震災で昭和大学やその他の医療機関から現地へ医療活動に行った救援隊やDMATの方々が御活躍された背景には、自分と同じ学生時代からの絶え間ない努力と経験、医学への熱意がある、ということを忘れずに、これからも日々精進して行きたいと思っています。

最後になりますが、ボランティアへ行くことを許可していただいた先生方・引率していただいた木内

先生・阿部先生はもちろんのこと、メンバーである塚本絵美さん・谷川洋明くん・大澤美瑛さん・有賀三希子さん・橋本アメリーさん、また後方支援として東京で毎晩電話報告を受けていただいた稲垣愛美さんをはじめとする方々にも感謝の意を込めて自分の報告を終わらせたいと思います。誰一人欠けても今回のボランティアは有り得ませんでしたし、自分も無事に活動を終わらせることは出来ませんでした。本当に有難うございます。

## ゴールデンウィーク学生生活動報告書

歯学部6年

上村 江美

私は震災後、ニュースばかり見る毎日でした。募金以外にできることはないか、学生だからできることはないか、いろいろ考えました。現地に行ってみれば考えなくともやるべきことはおのずとわかるかもしれない。そう思い、学生ボランティアを募集しているサイトを探し、大学生協で現地へ行く機会を得ました。

5月4日、オリエンテーションで、東松島市のニーズ調査班に所属することになりました。5月5日、6時45分に朝食、7時25分に出発、バスに乗ること2時間、9時30分東松島市到着。ニーズ調査ではなく人員不足の泥かき活動に変更になりました。

午前中は床上の泥かきと玄関の清掃・庭の流木や家財の撤去を行い、午後は農家の漬物樽についた泥やヘドロなどを清掃しました。

初日ということもあって、作業に没頭してしまい、現地の方々とあまり交流ができなかったことや午前も午後もやることがあまりに多く、作業を終了することができず、その点が班の反省点に挙がりました。しかし、伺った家のおばさんは私たちがしたことに感激して涙を流して喜んでくれたこともあり、今日1日やったことは少しは役にたつのかなとほっとしました。

5月6日、午前中、午後合わせて40軒ほどのニーズを聞きました。

震災から約2か月経過とあって、床上の泥かきなどは終わらせてある家庭が大半を占めていました。



しかし、床下や庭のがれきの撤去などはほとんど終わっておらず、ボランティアを必要としている現状を目の当たりにしました。

中には大工さんが9月まで来られない家庭もあり、床下のヘドロをとることができず、夏場にかけて細菌と悪臭の不衛生な環境の中暮らすことを余儀なくされるだろう家が多かったことにショックを受けました。

ボランティアは床板を外すことは禁止となっています。床板さえ取れば、床下のヘドロをボランティアのみんなで取ることができるのにと、とてももどかしさをおぼえました。

5月7日、昨日調査して優先と思われる家庭を順番に作業を行う予定でしたが、目的のお宅が留守だったため、現場を歩いて出会った人にニーズを聞き、その場で応えるローラー作戦に変更しました。午前中は庭の泥・ヘドロのかきだし、2軒目はアパートの1階の床上の泥かきでした。

午後と同じアパートの壁の泥を落とす作業をしました。

アパートの方はすぐにもここに住みたいとおっしゃって、避難所ではなく、たとえ不便でも、住み慣れた場所での生活がどんなに大切に思っているかを実感しました。

5月8日、今日の午前中で作業は終了。最後も泥かき、がれき撤去等の力仕事でした。

今回の5日間はあっという間でした。少しは役に立てたかなという思いと、もっともっとできたのではないかという心残りもありました。

私が被災地で一番感じたのは現地の人々が様々な思いがあるにも関わらず、みんな明るく、なにげない言葉にも心がこもっていることでした。

私たち学生が行った作業は東松島の惨状を見ると微力な頼りないものかもしれませんが、最後まで終わらなかった家もありました。

それなのに、私たちが現場から帰る時には年配の方々が「本当にありがとうございました」と言って深々と頭を下げられる。

私はボランティアに来て当然のことをただけで、被災者の方々の今までの苦労やこれからの苦難を考えると、もっと心を配ってお手伝いしなければと強い感情が駆け巡りました。

活動中、大学生協の方を含め、今回のメンバーと

出会えたこともとても大きな収穫でした。チームで活動するからこそ、個人では抱えきれない思いを共有したり、聞いてもらったり、女性にはちょっと重いがれきもみんなで運べば重さなんて関係ありませんでした。5日間寝食を共にしてできてきたチームは、私の現場での活動に良い影響を与えてくれました。

ニーズ調査では被災者の方と直接対話することで作業における新しい試みを提案できました。被災者の方と接するとき、握手をする、肩にそっと手置く、ちょっとしたことですが、伝わる手のぬくもりは温かく、優しいものでした。

だから、一番伝えたいことは、私たち学生が現地に出向くことの大切さです。私自身、現地に入って始めて知ることがたくさんありました。自分自身の中での考えも変わりました。若者という存在が現地にとってはとても価値のあるものだと感じ、学生ができることはたくさんあると確信できました。

そして、これだけで終わりにせず継続的に活動することが最も大切であることを痛感しました。

## ゴールデンウィーク学生ボランティア活動報告書

歯学部4年

橋本 アメリー

ゴールデンウィーク中、引率2名学生6名の計8人で、岩手県山田町にてボランティア活動を行った。4月29日に盛岡へ向けて出発した。毎日盛岡から山田町まで3時間半かけて通い、4月30日から5月2日までの3日間現地で活動、2日の夜行バスで盛岡を出発し、3日の早朝に東京に無事戻った。

### 1) 活動内容 (4月30日～5月2日)

4月30日

午前：女子2名は津波の被害にあった方の家の掃除（窓や天井の雑巾がけ）

残りの6名は山田町役場脇の公民館で支援物資の仕分け（衛生用品等）

午後：残りの女子2名も加わり、4名で津波の被害にあった方の家の掃除

先生2名、男子2名で支援物資の仕分けの続き  
5月1日

午前：女子4名は津波の被害にあった方の庭を掃

除（織笠地区）（ガラス破片等）

先生2名、男子2名は同じ地区の家屋内の家財道具等の運びだし

午後：8名全員で畑の掃除（材木・農耕器具・鉄板等）

5月2日

午前・午後：強風注意報が発令中だったため、屋外での活動は中止、ボランティアセンター内での支援物資（タオル）の仕分け

山田北小学校、山田南小学校、善慶寺、山田病院の見学もした。また最終日は町の中をかなり歩いた。

## 2) 活動を通して

### (i) 支援物資

届いているにもかかわらず、大量の段ボールが積み上げられたままであった。どこになにがあるのかを一目でわかるように配置するには工夫が必要であり、人手不足を感じた。1つの段ボールの中には1種類だけを詰め、中身の名称とその正確な個数を外側に表記する、という作業を送る側があらかじめ行っておくことで仕分けがずいぶん楽になるので、この事実をもっと積極的に伝えていく必要があると思う。

### (ii) 家や庭の掃除

津波によって押し寄せた砂や泥がいまだに大量に残っていた。天井には水分とともに砂・泥がしみ込んでおり、これらをきれいにすることは想像以上に重労働であった。被災している方々は精神的にも身体的にもかなり疲労していると思われるので、こういった作業をボランティアが行うことはとても有効だと感じました。同じような状況の家はたくさんあると考えられますが、家の掃除の依頼はボランティアセンターにさほど申請されていなかったのので、片付けが進まずに困っている方が大勢いらっしゃると思う。

### (iii) 畑の掃除

いわゆる瓦礫の撤去である。他のボランティアの方々と一緒に総勢60名で1つの場所の掃除を行った。私たちが活動した場所はもともと農業に使用する器具や肥料がおいてあった小屋だったと思われる場所であった。リン酸の入った肥料の袋や、錆びてはいるもののかなり鋭い刃の思い農耕器具も出てきたので、軍手やメガネ・マスクで自分の体を

守ることは必要最低限しておかなくてはいけないと再確認することができた。これだけの大人数で作業してもすべて終わらせることはできず、さらにこのような状況の場所は町中に広がっていると考ええると、今後ボランティアは千あるいは万単位で必要になると思った。

## 3) 全体を通して

行ってみないとわからないことばかりで、本当に勉強になった。東京にいたときに考えていたような医療に関するボランティアも徐々に必要になってくると思うが、まず私たちがしなくてはいけないことは、現地の方々の生活そのものを立て直すための活動であるということがよくわかった。救援隊として活動をした方がおっしゃっていた“医療の原点”の意味も活動をしている中で自然と理解できていたような気がする。人手不足のことも含めて今回の活動で学んだこと、感じたことは積極的に発信していく必要があると感じた。このような活動を今後も定期的に続けていきたいと思った。

## 学生ゴールデンウィーク活動（山田町）について

薬学部6年

塚本 絵美

## 1) 行った活動

4月29日（金）（移動日）

・9:40 高速バスで品川を出発。21:30 盛岡駅に到着。20:00 木内先生、阿部先生と合流し、夕食を摂りつつミーティングを行った。ホテルに向かう途中で、翌日の朝食・昼食を調達し、23:30 解散した。

4月30日（土）（活動1日目）

行った事：依頼主の家の搜索、家屋の清掃、市役所・港訪問

・午前中は大澤さんと私の2名で、静岡県からボランティア参加していた会社員3名の車に乗せてもらい、計5名で家屋の清掃の依頼主宅を搜索した。ボランティアセンターを運営している方たちが三重の方で現地について詳しくなかったため、始めは別の家の地図を渡されてしまい、かなりの時間を搜索に費やしてしまった。  
・家屋の清掃は、1階部分が津波で浸水してし

まった木造建築の拭き掃除を行った。天井や壁は海水の塩と藻まみれになっており、また棚の中は砂と硝子の破片が入りこんでいたので、履き掃除・拭き掃除を行った。

- ・午後は、橋本さんと有賀さんも参加し、計7名で掃除を行った。
- ・休憩時、お茶を飲みながら、住宅の方が津波の被害について話して下さった。
- ・作業終了後、山田町市役所へ行き、その付近の港の様子を見に行き、木内先生のお話を伺った。

5月1日（日）（活動2日目）

行った事：住宅の庭の清掃（午前中）、畑のがれき撤去、山田北小学校訪問

- ・午前は、女性で集まり、津波に飲まれた庭のがれき撤去とごみの回収を行った。
- ・午後は、60名体制で畑のがれき撤去を行った。ごみの分別をしながら、木片、金属片、漁業道具、農業道具などを畑から掘り出し、畑3区画分の清掃を行った。
- ・山田北小学校へ訪問した。

5月2日（月）（活動3日目、移動日）

行った仕事：物資の分別、善慶寺・山田南小学校・山田病院訪問

- ・強風のため、屋外での作業ができず、山田町災害ボランティアセンターにて物資の分別を行った。主にタオルや布団を、新旧・サイズ・種類ごとに分け、数を把握しながら、段ボールに詰める作業を行った。
- ・山田南小学校・善慶寺・山田病院へ訪問した。山田病院院長先生のお話を伺った。
- ・帰りは夜行バスを利用し、22:05盛岡駅を出発した。

5月3日（火）（移動日）

- ・夜行バスで、品川駅に到着し、解散した。

2) 印象に残った事・感想

医療救援隊に入る学生を募集していた時に躊躇してしまい立候補できなかったのが、少しでも何かをしたいと考え後方支援隊に参加しました。しかし、後方支援隊として活動する中で現地の情報を知り、何かをしたい気持ちは大きくなるばかりでしたので、今回の学生ゴールデンウィーク活動に参加でき本当にうれしく思います。活動を支援してくださ

本当にありがとうございました。

活動初日、山田町で見た光景は、想像以上に復興が進んでいない壊滅した町の姿でした。しかし、あまりの壊滅状態にその理解が追いつかず、自分が映画のセットの中にいるような現実味のなさを感じながらのスタートでした。

3日間の活動の中で、多くの人と知り合いましたが、みなさんとても穏やかで、悲しく打ちひしがれたという印象をうける被災者の方が1人もいらっしゃらなかったことが、印象に残りました。避難所の様子を見る機会をいただきましたが、その環境は非常に悪く、悲しい、つらいと感じていることが当たり前の中で、休憩のときに一緒にお茶をしてもいろいろな話をしてくださったり、自宅が被災されているタクシーの運転手さんは津波が来たときの話を話して下さったりなど、非常に親切にしてくださり、その力強さに圧倒されました。しかし一方で、疲れがたまっていることも目にとれて、強い無力感も感じました。いろいろな意味で被災者の方に気合をもらっての活動だったと思います。

活動をして一番感じたことは、活動しなければ分からないことが多々あるという事です。がれき撤去を実際に行ったことで、始めに山田町を見たときに感じた現実味のなさは、どのくらい復興までに作業があるかという現実的な視点へと変わり、物資の分別を行う事で、被災地が物資をどのように送ってほしいのかを考えなければいけないという姿勢につながりました。そして、3日間の中で最も感じたことは、復興には多くの人手がいるという事です。私は山田町に行く前には、活動にかかる費用を募金したほうが良いのではないかと不安に思っていました。実際、今回私が人手として動けたことは非常に小さいことばかりです。その金額に見合ったことができたとは思いません。しかし、復興のためには多くの人が少しずつでも力をだすことこそが重要であり、今回の活動は小さいながらも意味があったと思います。復興までは先が長い道のりだと思いますが、これからも関わっていきたいと思います。

最後になりましたが、このような貴重な機会をあたえてくださり、本当にありがとうございました。

## GW ボランティア生協チーム報告書

薬学部 6 年

日向野 理輝

大学生協ボランティアの第 4 タームとして 2011. 4/30～5/4 の 5 日間参加した。活動場所は宮城県の七ヶ浜町にある国際村避難所であった。昭和大学からは第 4 タームとして 3 人が参加（日向野、宇都宮、上木）したが、現地での活動内容は別であった。以下、日を追って私が参加した国際村避難所での活動内容と意見・感想を報告する。

1 日目：朝 9 時に東京駅から個人手配した高速バスに乗り予定通り 15 時 20 分に仙台駅に着き昭和大学メンバーと合流。駅からタクシーで宿泊先である“天龍閣”に 16 時前に到着。大学生協が手配した東京からのバスが渋滞につかまっているようなので 1 時間ほど待機。17 時過ぎに第 1 タームから参加している仙台の大学生協学生委員の進行のもと説明が始まる。活動内容は大きく 6 つに分かれる。①ボランティアセンター（VC）近くの公民館避難所での活動、②国際村避難所での活動、③大学生協新聞作成などの Web ページ作成班、④ VC でのフリーマーケット班、⑤七ヶ浜エリアの泥かきと訪問ニーズ調査、⑥東松島市での泥かきと訪問ニーズ調査である。第 3 タームのそれぞれ 6 班のメンバーから活動内容と適正について説明がされた。希望をとり私は②国際村避難所での活動に決まった。避難者数は 300 名弱で、第 4 ターム国際村班は学生 7 人であった。夕飯を挟んで第 3 タームの国際村メンバーから引継ぎがあった。主な活動は朝の掃除、避難所受付に配置されているマスクやティッシュ、飴やお茶などの配給と補充、来客者の対応、子供や高齢者と接する、というものだった。施設内の地図や物資・人の位置の説明や、受付には必ず 1 人以上が常駐すること・子どもと遊ぶ際は騒音に注意し限られた場所で遊ぶといったルールを引き継いだ。その際印象的だったことは子どもと接する際に暴言や暴力的な行動には注意した方がいいという申し送りだった。そこで自分は主に子どもたちと接するようにして、親などが昼間外で活動しやすいよう手伝いさせてもらおうと決めた。

2 日目：朝 7：15 に旅館を大型バスで出発して 50 分ほどで七ヶ浜 VC に到着。そこで春休みを利用し

てほぼ毎日国際村でボランティアしている現地の大学生と高校生 2 人と合流した。その 2 人に分からないことを聞きながら 4 日間共にした。VC から大型バスで 10 分ほどかけて国際村に到着。施設長、スタッフに挨拶をした後全員で施設内の掃除を始めた。避難所内は地区ごとに大きく 6 つの居住スペースに分かれている。外の簡易トイレはもう使用されておらず施設内のトイレも清掃員の方が掃除をしていた。施設の中庭にあるカフェスペースが共有スペースとなっていて、その掃除を私が担当した。お昼には学生生協から旅館で支給されたおにぎり 2 個と水をいただいた。午後には受付にも人が足りていたので、大学生 2 人で外の遊ぶスペースでボールを蹴って、子どもを呼び出す作戦にでた。20 分ほど遊んでいると小学校低学年くらいの女の子が来て作戦成功。その後も少数の男の子も加わって遊んだ。一部の小学生については前日の申し送りにあったようにいきなりなぐってきたり、“うるせえ”“死ね”“きもい”などの言葉もよく耳にした。真に受けてしまい軽いショックを受ける大学生もいた。4 日間で入れ替わり新しい人が出入りする環境で、子どもたちが緊張する様子がうかがえた。とにかく会話して遊ぶことで緊張をほぐすよう考えた。

3 日目：活動内容は 2 日目と同じだった。反省点は子どもとの遊びに夢中になり、居住者のペットの糞が入り口前にあったにも関わらずそれをすぐ片付ようとする気遣いができなかったことだ。受身ではなく自分から避難所の環境をよくするよう心がけた。そこで早速中庭のはき掃除とごみ拾いを始めた。中庭を周ることで外に洗濯物を干しにきたおばあちゃんや暇そうにしている子どもとコミュニケーションを取れて一石二鳥であった。また、避難所では自分の物を無くさないようにしっかり管理する必要があると感じた。自分の上着が見つからず探していると、スタッフ数人から“こちら辺に置いておくとすぐ持ってかれるよ”と心配の声をかけていただいた。次の日外で上着が見つかった時、物を自己管理しないと避難者への風評が発生し迷惑をかけてしまう可能性があると感じた。工夫した点は受付でお茶や水を支給する際に紙コップに名前を書いて渡すことでリユースしてもらおうよう心がけたことだ。元看護学部生のメンバーは主に高齢者と接するようにしていた。爪を伸ばたまにしている人が多いこ



とに気づき爪を切ったところとても喜ばれていた。

4日目：学生3名が国際村の倉庫に溢れかえっている物資の仕分けに振り分けられたこと以外は活動内容に変わりはない。子どもと施設の周りの林でかくれんぼをする中で、よく見ると林にゴミがたくさん落ちていることに気づき、施設の外周のごみ拾いを行った。昨夜の班のミーティングでは”自立への手助け”をテーマに議論していたこともあり、自分も子どもと一緒に頑張って掃除をした。朝の掃除中に遊ぼうとせがむ子に対して“掃除が終われば遊べるから早く遊ぶために一緒に掃除してみる？”といった言い回しをすると、素直に協力してくれた。掃除中も“誰が1番きれいにできるかな？”などと言うと夢中になって廊下の雑巾がけをする姿が印象的だった。避難所にはさまざま人がいるので他のボランティアやスタッフとのコミュニケーションも意識するようにした。ある時DMATのユニフォームを着た医療隊の方を見かけ思わず話をかけてみた。薬学部の学生ということを伝えと国際村の中心にある医療スペースへ見学させていただけることとなった。島根から来ているそのチームには薬剤師も1名在籍していた。薬剤師には患者情報・不足薬品を収集する際の現地の医療施設への電話での問い合わせやなど、薬学面でのロジスティックとしての活動に需要があり、今後も薬剤師の活動範囲を増やすための提案の余地は大いにあるという話をDrからうかがえた。

5日目：VCで全体の朝の挨拶をしている最中、急に涙が出てきた。わけもわからないまま国際村に着いた瞬間涙が止まらなくなったので、みんなとはぐれ1人になり感情を落ち着けてから朝の掃除を始めた。今まで遊んだ子の名前はメモ帳に書いて必死に覚えて、遊ぶ際はどんどん名前を呼んだ。そうすることで距離が狭まり、子どもたちも喜んでくれた。中学生1年生は部活の仮入部ですでに学校が始まっていて、一緒になって何の部に入るかで盛り上がった。小学生には1日目2日目と体を殴られたり大変だった分、とても懐いてくれていることに気づき驚いた。医療班には週5回仙台から心理保育士の方も在籍していることを知り、その方に子どもたちの暴言、暴力について尋ねてみた。震災から2か月近く経って大人にも知らず知らずストレスが積み重なってきている環境では、そのストレスが自然と子

どもに向いてしまうケースが少なくないという。周囲の大人がイライラする中で子どもははけ口の無いストレスを受ける。そのサインをわれわれはきちんと読み取ってケアをしていかなければならないということだった。話の後半でその方の目に浮かぶ涙に気づき、思わずこちらもらい泣きするところだったのでお互い逃げるように去ったことを今でも覚えている。子どもから手紙や折り紙をもらったりして14時過ぎに国際村を出た。寂しい思いをさせたくないで、こどもたちには明るく簡単に別れの挨拶をして出てきた。また来てねと涙を流しながら見送りに来てくれた女の子の顔はまともに見ることができなかった。

4日間毎日、活動を終えて旅館に戻ってから夕食を挟んで各班の報告と班ごとのミーティングを行った。昭和大のメンバー3人はそのミーティングが終わってからロビーに集まり各自の活動内容の報告と改善点、思うことなどを自然と話し合っていた。上木は公民館避難所での活動だったので、2つの避難所の意見を参考にし合った。全体ミーティングで却下にはなったものの、2つの避難所の子どもどうしの交流をしてみたらどうかという意見もこの3人の話し合いで生まれた。まだほとんど人の手の入っていない東松島市での泥かきなどが宇都宮の担当だったので、彼女の体力が心配だったが夜のミーティングでは笑顔で元気ですと言う姿が見れて安心できた。泥かきを担当した家の方とのおもしろいやりとりなどを笑顔で話してくれていた。帰りは17:30発のバスであったため最終日のミーティングと第5タームへの申し送りができなかったことが心残りであるが、第5タームで参加する昭和大の3人に期待を残して帰路についた。帰りは渋滞にはまり終電を逃したが、翌朝3人とも無事家に着くことができた。

今回貴重な体験をさせていただいて、VCと国際村の方々、昭和大学のスタッフ各位、大学生協に大変感謝しております。この経験を今後とも活かせるように努める次第です。ありがとうございました。



## 岩手県山田町でのボランティアについて

薬学部 5 年

有賀 三希子

4 月 29 日から 5 月 2 日の 4 日間、岩手県山田町にて教授 2 名、学生 6 名でボランティアを行った。29 日は東京から盛岡までの移動のみであったため実際の活動は 30 日から 2 日までの 3 日間であった。

活動 1 日目 (30 日)、初めて被災地の現状を目の当たりにした。実際目の当たりにしてもまだ正直これが現実におきたことだと実感できなかった。9:00 にボランティアセンターに到着し、ボランティアセンターより各自に仕事の割り振りがされた。午前中は山田町公民館の物資の仕分けを行うこととなった。公民館には各地から送られてきた物資が皿、コップ、トイレットペーパーなどの大まかな分類でゾーンごとに置かれていた。しかし、その中で大きさや細かい種類の分類はされていなかった。ので必要なものを取りやすくわかりやすくまとめるため細かく分類することとなった。さまざまな人々の協力により多くの物資があったが物資があるだけでなく、それを仕分けし使いやすくすることも大切なのだと知った。また送る側も仕分けや整理する人が見てすぐに分類できるように工夫してまとめたり表示することが必要であると感じた。午後は民家の片づけを行うこととなった。海岸沿いの家で 2 階の床上 30 cm ほどまで津波が来たようであった。民家では 1 階の柱や壁、天井の水拭きなどを行った。木に泥がしみ込んでしまっており何回も水拭きを行わなくてはいけないというお話を聞いた。実際拭いても拭いても砂が残っており、家は残ってはいてもそこに住むことが想像以上に大変であるとわかった。

活動 2 日目 (5 月 1 日)、午前中は庭の掃除を行った。庭の芝生には津波で流れてきた石やガラス、断熱材などさまざまなものがあつた。以前に近い状態まで戻すために細かいものまで取り除くことは非常に時間のかかる作業であった。とても小さなガラスが多くありきちんと掃除しないと危険であると感じた。午後は他のボランティア約 60 名とともに畑の瓦礫の撤去を行った。畑には家の木材や漁業道具、鉄板などさまざまなものがあつた。土の中まで鉄板が埋まっていることがあり想像以上に津波により土

が運ばれてきたことが分かった。また海藻や貝もあり本当にここまで津波が来たのだと実感するとともに、この作業により津波の被害の大きさと復興への難しさ、そして津波の怖さを感じた。

活動 3 日目 (2 日)、強風の影響で外での活動ができなかったためボランティアセンターの中で物資の仕分けを行った。数量や細かい分類がされていないため物資を配るのが大変だと言う。次に見た人が一目でわかるように分類するのは思った以上に難しく時間と人手のかかる作業であることが分かった。

今回のボランティアは本当に貴重な経験となり多くのことを考えるきっかけとなった。ボランティアは一時的ではなく継続的に行うことが大切であると感じ、また多くの人手が必要であると感じた。現地の方の話ではボランティアのニーズはあるが人手が足りず結局ボランティアに来てもらえないため初めから要望を出していない人もいたようであった。

今回私たちが体験したり見たことはごく 1 部でありこれが全てではない。また 3 日間でできたことは全体の被害から見たらとても小さいが少しずつでも積み重ねていくことで大きな成果が出ると思う。これからは今回の経験から自分にできることで何ができるか考え実践していきたい。

今回のボランティアは先生方、総務課、後方支援のメンバー、ボランティアセンターの方、現地で出会ったボランティアの方の協力があったからこそ無事に活動できたと思います。本当にありがとうございました。

## 山田町のボランティアに参加して

薬学部 5 年

大澤 美瑛

### 1. 被災地の様子

被災地に初めて足を踏み入れたときは、目の前の景色が現実のものとは思えなかった。「戦争が起ったみたい」というのが最初の感想。倒れている防波堤、折れた電信柱、一回転した家、潰れた車やバイク、瓦礫と化した家々…。TV で見るより一つ一つの建物に人が生きていた、暮らしていたことが伝わってくる。道端に落ちているゲームカードを見て「ここには子供がいたのかな」と思う。解体 OK

と赤いスプレーで書かれ、主を失った家は泣いているようだ。「つい2か月前までは何人もの人が毎日生活してたんだろうな」と思うと泣きそうになった。廃墟の中で懸命に働く人、こいのぼりをかかえて歩いている人、車を走らせる人…精一杯頑張っている人がいる。私も短い間だけど、頑張ろうと思った。瓦礫の山のなかで花を咲かせている桜、青い空に泳ぐこいのぼりは、綺麗で、まるで「けばれ岩手」と応援しているようで、印象的だった。

## 2. 人の温かさと強さ。

1日目は、津波の被害にあったお家の拭き掃除をした。2階建ての大きなお家だったのだが、2階の床から60センチくらいまで浸水したらしい。天井や壁を拭くと白い雑巾がすぐに真っ黒になった。天井に塩や砂、石が付着しているのを目の当たりにすると、ここまで海水が来たんだなあ、と思いぞとした。その家に住む方がご無事で本当によかったと思う。おじいさん、おばあさんは私たちのことを気遣って下さり、2回も「休憩しようか、お茶入れるよ」と炬に私たちを呼んでくれた。台を使って天井を拭く作業は首が少し痛くなるが、頂いたジュースやお菓子を食べ、皆で笑い合うと元気が出てくる。おじいさんは「いつもは今頃牡蠣や大魚をとるんやけどな～来年の冬またおいで、来たらごちそうするよ」と言って笑った。衝撃だった。この方は津波に襲われても、目の前の風景が瓦礫の山だとしても、もう一度立ち上がれると信じている。ボランティアのことまで考える余裕もある…なんて強いのだろう。逆に私が励まされた。

## 3. ボランティアの必要性

2日目は瓦礫撤去を行った。ガラスや釘はもちろん、庭から包丁がでてきたり、大きな田から鉄板、一輪車、農薬の袋などがでてきて驚いた。現実には思えなかった被害を身にしみて感じる。瓦礫撤去は60人位の学生で泥や土にまみれながら行ったのだが、本当に少ししか終わらなかった。人手不足を感じた。もっとたくさんの方がいなければここは回復できない。

## 4. 忘れてはいけないこと

3日目はVCで救援物資のタオルの仕分けを行った。バスタオル、タオル、フェイスタオル、ハンカチなどを新品、中古にそれぞれ分ける。段ボールや救援物資は山積みだ。送った人は「何か自分にでき

ることを」と思って詰めたのだろうな…。一つ一つを丁寧にたたみ、分類し、段ボールに詰める。ボランティアに大きい、小さいはない。地道で目立たない作業も必要とされているし、誰かを喜ばせることができる。

地震、津波は忘れられないものになったけれど、私達はこの「他人を想う心」も忘れてはいけないものだ、と感じた。

## 大学生協ボランティア活動報告

薬学部5年

大村 恵

### 【活動内容】

5月4日（水）移動、オリエンテーション

9:00 新宿、御茶ノ水発（高速バス）

15:00 宿泊先着（仙台市内）

16:00 第4タームからの引継ぎ式及びオリエンテーション

20:00 夕食後、ミーティング

（自己紹介、レクリエーション）

5月5日（木）、5月6日（金）、5月7日（土）

A～F班に分かれて活動

7:25 出発

◎A～E班（七ヶ浜町）

8:30 七ヶ浜ボランティアセンター着

9:00 マッチング（担当割り振り）

担当に分かれて活動開始

16:30 七ヶ浜町発

18:15 宿着後、ミーティング

◎F班（東松島市）

9:00 東松島ボランティアセンター着

9:30 準備体操、用具準備、担当決定  
担当に分かれて活動開始

15:30 東松島市発

5月8日（日）引継ぎ、移動日

午前中 同上

14:30 活動終了、仙台へ移動

16:00 グループディスカッション及び終了式

18:00 仙台発（高速バス）

24:00 新宿着、解散

### 【班分け】

大学生協ボランティア第5タームに参加した全国の大学生60名は、以下の班に分かれて活動を行った。(A～E班：七ヶ浜町、F班：東松島市)

- ・A班 中央公民館(避難所、約400人)  
仮設トイレの清掃、ごみ回収、環境整備、レクリエーション、カフェ運営、資材管理
- ・B班 国際村(避難所、約300人)  
清掃、ごみ回収、備品の補充、レクリエーション(クイズ大会)
- ・C班 Web管理  
Webサイトに情報をアップする、終了ニーズのマッピング、データ管理
- ・D班 フリーマーケット運営  
物資準備及び運営(火～日 13～15時フリーマーケット開催)
- ・E班 ニーズ調査《P5大村》  
住民宅を訪問し、被害状況や片付け、泥かき等のニーズの有無を把握
- ・F班 泥かき《D6上村、Ns4山内》  
家具や壁の移動及び清掃、床下の泥だし

### 【活動を終えて】

E班に所属し、七ヶ浜町遠山地区において片付け・物資・医療などといったニーズの調査を行った。4日間のうち3日はニーズ調査にあたり、うち1日は連休明けの小学校再開に向けて、七ヶ浜町松ヶ浜地区の小学校通学路のクリーンアップ運動に参加した。

クリーンアップ運動は6名1組となり(全体で何名参加したかは不明)、道路に落ちているガラス片や瓦礫、土砂などを収集し、土嚢袋にまとめた。私有地の片付けは認められていないため道路のみの清掃であったが、小学生が通学するという意識を、歩行中に危険がないよう細部まで留意して清掃にあたった。

ニーズ調査は、個人ボランティアの方々も含めた14～24名が2人1組となり、住民宅を1件ずつ訪ね、住民の抱えるニーズを幅広く収集し、改善に繋げることを目的とした。3日間で遠山地区約1100件の住民宅を訪問し、調査終了後、住宅地図に世帯ごとの調査結果を記録し、ニーズ対応完了の有無を把握できるようにした。また、住民の意見や要望などをまとめ、区の役場に提出した。

訪問すると、多くの人は「沿岸部の人々に比べれば、うちは大丈夫です。他のお宅を助けてあげてください。」という。しかし、話をしていくうちに普段は口に出さずにいるであろう事柄を徐々に話し始める。遠山地区は、津波の影響は比較的少ない地域ではあるが、実際に訪問してみると屋根瓦の損傷や外壁・内壁のひび割れ、地盤沈下などの被害は多い。夜眠れない、体調に異変を感じているがこれぐらいのことで病院に行ったら迷惑がかかる、という受診を遠慮している人も見受けられた。再び災害が起こるのではないかと恐怖感・不安を抱えている一方、自分は恵まれている方だ、これぐらい何てことない、と遠慮しがちな傾向にあった。被害の程度に差はあるものの、被害を受けた人々は皆共通して精神的負担を抱えており、今後精神面のフォローが重要となっていくであろうと思われた。高齢者で一人暮らしの住民には、近所で連携が取れているのか、援助してくれる人はいるのかといったことが確認できるように心がけた。

復興に向け長期的な支援が必要とされており、今回に限らず継続してボランティアに参加していきたいと思う。また、この経験を生かし、相手の立場になって寄り添った医療を提供できる薬剤師になれるよう、日々精進していきたい。

震災の被害を受けられた方々に、改めてお見舞いを申し上げますとともに、1日も早い復興をお祈り申し上げます。

### GW ボランティア活動報告生協グループ前半組

薬学部5年

宇都宮 佳子

#### 《日ごとに自分の活動した内容》

①4/30：新宿駅発の高速バスにのり、仙台駅へ向かう。GWということで渋滞が懸念されたが時間通りに到着した。その後生協グループの集合場所である旅館「天龍閣」にタクシーで向かう。旅館では第Ⅲタームからの引継ぎや活動内容でわけられたチーム分けを行い、私は東松島市大曲地区での泥だし作業を行うチーム(Fチーム)に配属になった。Fチームは30人程度で構成されており、その中でさらに5～6人のチームに分かれた。チームごとに

自己紹介やお互いを知るためのレクリエーションなどを行った。

② 5/1：旅館からバスで2時間かけて東松島市に向かう。東松島市での活動は第Ⅳタームから始まったものだったので、現地に行きボランティアセンターの方と話しをしなければ実際に行う具体的な活動内容や、現場の状況がわからない状態だった。現地に到着し、ボランティアセンターの方々から指示をもらう。チームごとにボランティアの必要な家を訪問し、被災された方々のニーズに合わせて泥だし作業や家財道具運び、清掃などを行った。

活動時間の目安は午前中2時間と午後2時間（10：00～12：00、13：00～15：00）であった。午前中に訪問した家では庭のヘドロの運び出しを行った。午前中に訪問した家での活動は午前中で終了したため、午後は他のチームが活動している家を訪問し手伝いを行った。午後に訪問した家は事務所のような建物であったが震災後まったく手をつけていない家であった。そのため家財道具を全て外に運び出し、ヘドロを土嚢袋にいれて運び出す作業を行った。また、食器など洗えるものは水ですすいだ。活動を終え旅館に戻り、チーム内でのミーティングや大学生協グループ全体でのミーティングを行った。

③ 5/2：東松島市に向かい、活動を行った。この日に行った家では庭の倉庫のような建物の中のヘドロの片付けをした。震災後手をつけていない倉庫で、ヘドロの量がとても多かった。午前中だけでは片付かなかったので午後も引き続き活動を行った。途中から他のチームが手伝いに来てくれていた。活動を終え、旅館に戻りミーティングを行った。

④ 5/3：東松島市に向かい活動を行った。この日に行った家では津波で流れついた大量の木材の片付け、またヘドロの片付けを行った。庭の広範囲にヘドロが堆積していたので1日ばかりで活動を行った。活動を終え、旅館に戻りミーティングを行った。

⑤ 5/4：東松島市に向かい、活動を行った。この日に行った家では庭のヘドロの片付けを行った。また津波で大きな鍋が流れ着いていたため釜戸を作りたいとの要望があったため、釜戸を作った。この日は東京に帰る日だったので午前中のみの活動であった。旅館に戻るバスの中でミーティングを行い、旅館につくと第Ⅴタームの学生が集まっていた

ので引継ぎを行った。引継ぎの途中で旅館から仙台駅に出発し、東京へ的高速バスに乗った。

#### 《印象に残ったこと・感想》

テレビや新聞から得る情報と実際に現地に行ってみて得られた情報はまったく異なるものであった。バスを降りて最初に目にした光景は忘れられないものになった。活動の合間の休憩で、被災された方々とお話をさせていただく機会をいただき、現地に住まれている方がどのような経験をしどのような思いをしているのか直に触れることができた。

### 生協ボランティア報告書

保健医療学部看護学科4年

山内 絵美

#### ・日ごとに自分の活動した内容

活動開始1日目は、与えられたご家庭のニーズが活動基準外だったため、あまりすることが出来なかった。1件のお宅で、庭のヘドロを掘り出し、土嚢袋に詰めて運ぶ作業を行った。ヘドロはビニールや木屑が混じっており、臭いがあって重くなっていた。2日目からは、メンバー全員で作業前に準備体操をした。その後、床下のヘドロを取り出して土嚢に詰める作業をした。3日目は、他班と合流し、1件のお宅の、荷物を出してソファを拭き、倉庫の物を出して倉庫を丸洗いした。その後、もう1件のお宅に行き、アパートの壁を拭いた。4日目は午前中だけだったが、1件のお宅の庭の通り脇に、道に水が入らないように一時的につくられた砂山を崩して土嚢に入れて運ぶ作業を行った。

#### ・印象に残ったこと

今回のボランティアで一番印象に残っていることは、初めて作業をさせていただいたお宅でのことです。庭の泥出しを行い、その日の作業を終えて帰る際に、奥様が出て来て、笑顔で見送って下さったのですが、その後、私たちに背を向けて涙を流されていました。私は声をかけることが出来ず、気になりながらも、先に行ったメンバーを追ってしまいました。その夜に樹恩の方が、被害に合われた方の気持ちに寄り添うことがいかに大切であるかを話して下さり、はっとしました。あの時、奥様は何を思っていたのか、それを受け止めることが、私には



必要だったのではないかと思います。こちらのお宅のように、被害に遭われた東北の方々は、お宅にうかがった皆様は、ボランティアに対してとても気を遣われていて、我慢をされているように感じました。助けを求めていることを言えず、自分は大丈夫だと言ってしまうような人々が多かったです。そのため、お一人お一人にお話をうかがうことができ、心の内を聞くことが出来ることは、災害支援にとっても大切な事だと実感しました。

#### ・感想

今回のボランティアを通して、被災された方々の気持ちを直にうかがうことができ、復興支援を自分の体で行うことが出来たことは、とても辛い状況におかれた方々の苦しみを理解する上で、これからの自分の将来において、とても貴重な経験になりました。何も知識のない状態で、たった一人の学生が現地に行ったところで、何が出来るのか、また、帰って来てからも、自分は何が出来たのかと、何度も繰り返し考えました。全体から見たら、本当に小さなことだったと思います。しかし、一軒一軒足を運び、お話をうかがい、見つめ合い、手を取り合ったことは、意味のある事でした。被害に遭われた方々にとっても、目に見える支援になったのではないかと思います。

今回のボランティアでは、共に作業をした学生たちとの意見も聞くことができ、自分の視野も広まったと感じています。私がこれから出来ることは、このつながりを大切にしていくこと、そして、経験してきた気持ちや思いを大切に、今、自分が目指していることを、しっかりとかなえることだと思います。

### 大学生協ボランティア参加報告書

保健医療学部作業療学科2年

上木 麻衣子

#### ◇内容

活動場所：七ヶ浜町中央公民館  
(生涯学習センター)

4月30日(土)

- ・宿泊所へ移動、事前ミーティング  
(活動グループ分け、前ターム参加者からの引

継ぎ)

5月1日(日)

- ・公民館の環境整備(仮設トイレの清掃、公民館周辺のゴミ拾い)
- ・公民館の子供と遊ぶ
- ・公民館の各世帯の部屋を回ってご挨拶

5月2日(月)

- ・公民館の環境整備
- ・公民館の子供と遊ぶ
- ・ボランティアセンターの資材(一輪車、スコップ等)の整理
- ・カフェ(お茶やジュースを飲んで話せるスペース)の運営手伝い
- ・津波の被害に遭った個人宅へ出向いて、食器洗い、整理

5月3日(火)

- ・公民館の環境整備
- ・公民館の子供と遊ぶ
- ・カフェの運営手伝い
- ・資材管理(数のチェック、貸し出しチェック表の作成)

5月4日(水)

- ・公民館の環境整備
- ・公民館の子供と遊ぶ
- ・カフェの運営手伝い
- ・資材管理(貸し出しチェック表作成、地元の方に引継ぎ)
- ・公民館のお年寄りの方と指の体操、お話

#### ◇感想

今、心から感じているのは、この5日間の活動は自分にとってスタート地点だということだ。また、これからも何かしらの形で継続的に東北と関わりたいという思いも強い。なぜなら活動前と活動後で、東北やボランティアに対する見方が大きく変わったためだ。

出発前に考えていたことは、5日間というまとまった期間で、何かしらできることがあるだろうということ、そして充実感や満足感も得られるだろうということだった。しかし活動を終えて自分の中に蓄積されたものは、想像と違って、単純な充実感や満足感でなく、不快感も残った。また「この5日間で〇〇ができた」と言葉に表すことはとても難

しい。

活動を通して、ボランティアとは何かを考え続けていたが、今はその一部分が分かったように思う。それは、ボランティアとはそもそも“何かを成した”という目に見える形での充実感を求めるものではない、ということだ。被災者の方に受け入れてもらえた素直な嬉しさ、短期間の活動では信頼関係を築くのが難しいという無力感、さまざまなことを感じ、考えた。しかしどれもが、目に見える形のものではなく、そういう意味でとても曖昧なものだった。

しかし、私が友人や家族、先生などにボランティアのことを話すときは「今まででいちばん充実したG.W.だった」と伝えている。ここからは個人的な話も含んでいるが、自分が得たものについて述べる。本当に与えられるばかりの5日間だったが、特に得たものは多くの人との出会い、コミュニティの

広がりだ。もちろん、ボランティアの目的は多くの人と出会うためではなく、学生としてできることを少しでもするためだ。しかし、公民館やボランティアセンターなどの七ヶ浜町民の人々、ボランティアに参加していた学生との出会いは、自分にとってとても刺激になった。

うまくまとめることが難しいのだが、まとまらなくても、忘れないようにしようと私は思っている。いつかここで見聞きしたことがつながり、後々何かに気づけたり活かすことができれば、と考えている。

また、これを誰かに発信するべきだとも考えている。そうすることで私も、周りの人も、震災を忘れないでいることができるのではないかと思うからだ。報道とは違う現地の状況、見聞きしたことを学生が目線で伝えられれば、と考えている。